「努力でつかんだ最高賞」

佐沼高等学校１年

千葉美沙希

令和３年用国土緑化運動・育樹運動ポスター原画コンクール
中学校の部　特選　農林水産大臣賞

「今回の作品はまだまだ手を加えたい箇所があったので、受賞と聞いたときは耳を疑いました」と振り返る千葉美沙希さん。「令和３年用国土緑化運動・育樹運動ポスター原画コンクール（２０２０年10月16日、審査）」中学の部において、全国８３０校８６８４点もの応募の中から、当時石越中３年だった千葉が最高賞の特選・農林水産大臣賞を受賞した。

応募のきっかけは、美術の先生からコンクールを紹介されたこと。資料に目を通すと、募集しているコンクールが３つ並んでいた。全てのコンクールに応募したい気持ちはあったが、その時点で締め切りまでは残り１カ月半。短時間で３作品を仕上げる必要があった。「絵には完成が無い」と話す千葉は、完成まで何度も見直し、色を重ね時間をかける制作スタイル。「間に合うだろうか」と幾度も自分に問いかけた。

中学では生徒会に所属しながら、剣道部では部長としてチームのまとめ役を務めた。剣道はスポ少にも所属していたため、毎日が忙しく過ぎ、自由な時間が限られる。美術の授業もいつも絵を描くわけではなく、更に昨年は楽しみにしていた運動会のチーム旗作成が中止。描く機会がまた一つ減り、フラストレーションが溜まっていた。「描きたい」と、強い思いを抱く千葉は心を決める。中学の集大成の作品にしようと、並行して趣旨も作風も異なる３作品の制作に挑むことを選んだ。

国土緑化運動・育樹運動ポスター原画コンクールは３つのコンクールの中で締め切りが最も遅く、仕上げたのは最後。２作品を仕上げたころには、残された時間はわずかだった。応募作は、苗木を育てることで命の源である森林を親から子へ伝え、その循環が未来につながっていくことをテーマに制作。

作品は、植樹された苗木を母親の手が支え、子どもがそっと水をかける構図。苗木や親子の手は授業で習った切り絵で表現。母親の手は、実際に自分の母の手をなぞりぬくもりを写し出した。一番苦労したのは苗木の上から柔らかに降り注ぐ虹の光。目の細かな網をブラシでこするスパッタリングの手法を用いた。幅の異なる何色もの虹は、台紙の形を変え少しずつずらしながら塗り分けた。奥行きのある森は、本物の木をじっくり観察しリアルな木を描いた。そこに小さなスポンジで淡い緑を何度も重ね、少しずつ濃淡をつけるといった骨の折れる作業を続ける。絵の中心に視線を誘導するように、苗木を縁取る白い線が森の緑に映えるように仕上げた。

時間を置き、改めて見直してみると何か物足りなく感じた。「緑には赤が映えるはず」と考えた千葉は、最後にワンポイントとして、小さなテントウムシを苗木に乗せた。

千葉渾身の作品は審査員の高い評価を得て、見事に最高の賞を受賞。他の２作品も、それぞれ県知事賞や県優良賞を受賞した。

絵を描くことが好きで、小さなころから数えきれないほど何冊ものスケッチブックに描き続けてきた。好きな世界観は、現実にはない空想の世界。過去の作品は、風景画でも静物画でも器用に描き分けてきた。苦手なのは、ポスターらしい強い色使いやべた塗りの絵。ポスターコンクールは本来得意分野ではないが、日頃からいろいろな写真を見てイメージを膨らませている。パーツごとに練ってきた数々の構想は、絵画制作の時に初めて一体化する。

「あるコンクールに向けてやってみたいアイデアがある」と話す千葉。頭の中では次のコンクールに向けた構図を描き始めている。

受賞作「育てよう緑の大地　つなげよう次の世代へ」

CHIBA Misaki

2004年6月17日、石越町第九在住。佐沼高等学校在学。2017年度第29回読書感想画中央コンクール入賞他、読書感想文や書きぞめなどで受賞歴多数。「想像だけの絵は限界がある」との考えから、現実の光の当たり方や影のつき方にこだわりを持ち、リアルさを追及する。かわいがっているセキセイインコは手乗りするほどに懐いている。